

現場DXで未来型コミュニケーション

サイエンスアーツと地域に根ざした職種を支援

NTT東日本とサイエンスアーツは業務提携し、未来型チームコミュニケーション「Buddycom」を活用した現場ソリューションを推進している。

「現場」のDX化を切り口にさまざまな領域へソリューションとして訴求する方針だが、とくに地域に根ざした職種の現場を支援するツールとして推進している。

サイエンスアーツが提供するBuddycomは、インターネットを利用して無線機やトランシーバのように一斉通話ができる現場向けチームコミュニケーションアプリ。

「現場」のDX化を切り口にさまざまな領域へソリューションとして訴求する方針だが、とくに地域に根ざした職種の現場を支援するツールとして推進している。

スマートフォンの端末で音声や動画、位置情報、AIを利用したチームコミュニケーションが可能だ。音声テキスト化やトランシーバ翻訳などの機能も付いている。

「現場」のDX化を切り口にさまざまな領域へソリューションとして訴求する方針だが、とくに地域に根ざした職種の現場を支援するツールとして推進している。

NTT東日本は今回の業務提携について「当社は従来から現場コミュニケーションの力を活かしているが、ニューノーマル時代に入り、リモートワークが進み、Teamsなどのウェブ会議などが普及する中において、現場コミュニケーションのさらなる活性化を目的にBuddycomを当社の商材として取り扱おうとした」と話す。

「現場」のDX化を切り口にさまざまな領域へソリューションとして訴求する方針だが、とくに地域に根ざした職種の現場を支援するツールとして推進している。

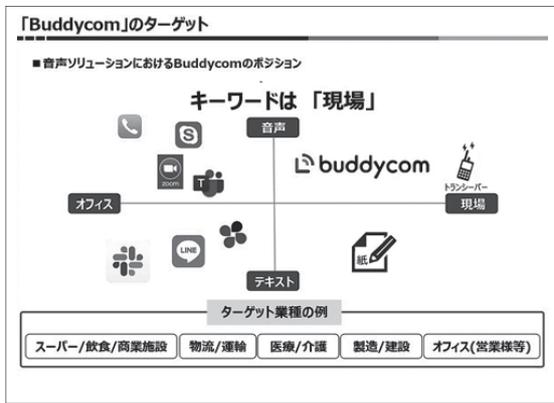
Buddycomのポインツとして、リアルタイム性の高いコミュニケーションを可能にする点が挙げられる。Buddycomは通常のウェブ会議ツールにはない特長の自動で受信できる。これは通常のウェブ会議ツールにはない特長の自動で受信できる。これは通常のウェブ会議ツールにはない特長の自動で受信できる。

「現場」のDX化を切り口にさまざまな領域へソリューションとして訴求する方針だが、とくに地域に根ざした職種の現場を支援するツールとして推進している。

「Buddycomを使えば、作業者はハンズフリーで通話ができるので、作業をしながらのコミュニケーションが可能になる」とNTT東日本は説明する。

「現場」のDX化を切り口にさまざまな領域へソリューションとして訴求する方針だが、とくに地域に根ざした職種の現場を支援するツールとして推進している。

comを業務効率化を図るコミュニケーション手段として提案。ギガらくWiFi「ギガらくカメラ」をセッットにしたソリューションを展開し、受注につながる。例えば医療機関のコミュニケーション手段は主にPHSや携帯電話だが、一対一の通話になるため、それ以外のスタッフに情報を伝達する際、どうしても食い違いが出てしまう、結局、皆が同じ場所に集合し、再確認することになる。これでは非効率だし、密も避けられない。一方、Buddycomは一斉通話ができ、すべてのスタッフに正確な情報を伝達できるので、いちいち集合しなくて済む（NTT東日本）。



ケースも出ている。医療スタッフがカメラを通じて遠隔から患者を見守りつつ、Buddycomで会話をするという使い方も。製造現場では、工場内のスタッフ同士、あるいは工場内のスタッフと事務所のスタッフのコミュニケーションツールとしての活用や、ベテランのスタッフが遠隔から新人スタッフを指導する際の利用などが挙げられる。Buddycomは翻訳機能も実装しており、外国人労働者も利用できる。

「今後はスマートグラスとの連携も考えていきたい。スマートグラスを装着した新人スタッフが目前の状況を映し、遠隔にいるベテランがその映像を見ながら、Buddycomで新人に指示を出る中で、お客さまから